

併し、新たに虻田尋常高等小
校に改称した学校の校長として、
今度は和人、アイヌという一切
の区別なく、その後20年間虻田
を一切離れることなく教員生活

を全うします。

カムイとよばれた
白井柳治郎

教員退職後は、旧虻田町役場



虻田第2尋常小学校開校式



多田康之さん
(白井日記をひもとく会)

白井柳治郎は、アイヌ教育において先達果たされた人たちの一人として邁進しました。アイヌ学校の教師として来町して110年を迎える中で、改めてその一端を記録しようと、白井日記のデータ化を進めています。偉大な先人達の一つひとつの功績が、現在のまちを形成しています。明治期の白井の献身的な活動も、その一つに間違いなく数えられると思います。

の嘱託職員として、主に町史の編集作業に従事し、資料の収集や執筆など町の文化活動にも大きく貢献することになります。

一方引続きアイヌ民族の生活上のため、ウタリ支部(当時)の役員や互助組織の責任者を務めたり、夜学を開いたりして、アイヌの人たちの生活の中に深く入り込み、彼らの生活全般の相談や地位向上に寝食を忘れて、亡くなるまで奮闘していきます。

こういった無私の様々な実践により、アイヌの人たちから「カムイ(神様)」と呼ばれ、町民からも畏敬の念を持たれる存在となりました。

今から100年ほど前の北海

道では、開拓がやつと本格化し、羊蹄山麓の開拓が始まりだした頃です。開拓の鉞がおろされたばかりの中で、差別や偏見に苦しむ、厳しい状況に置かれていたアイヌの人たちの窮状を救おうとする白井の活動は、想像を絶するような日々の毎日ではなかったかと思えます。

昭和41年(1966年)3月22日白井は、渡道してから65回目の春を待たずに、83歳の生涯に幕を閉じました。3月26日の告別式には、1,300人の会葬者が別れを惜しみ、その葬列は1キにも及びました。この葬儀が白井の全てを物語っています。

白井柳治郎略年譜

明治15年(1882年) 7月
12日茨城県真壁郡関本町(現在の築西市)に生まれる。生家は染物業との兼業農家。

明治33年(1900年) 4月
駒場農科大学付属農業教員養成所入所。5月北海道旧土人救育会主催の小谷部全一郎の講演会を聞き、アイヌ教育に一生を捧げることを決意する。

明治34年(1901年) 3月
駒場農科大学付属農業教員養成所を卒業。8月小谷部全一郎が計画した虻田学園の教師となるため同氏とともに虻田に移住。

明治36年(1903年) 虻田
第2尋常小学校の校長就任。

大正10年(1921年) 虻田
第2尋常小学校閉校。虻田第1尋常高等小学校校長に就任。

昭和16年(1941年) 3月
第2尋常小学校、第1尋常高等学校合わせて40年の教師生活に幕をおろす。8月虻田町役場嘱託となる。

昭和23年(1948年) 町の
町史編さん事務取扱を命じられる。

昭和41年(1966年) 3月
脳軟化症で逝去83歳。